

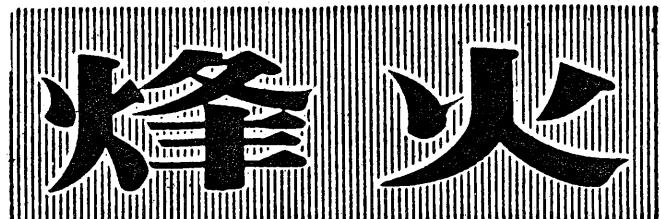
帝国主義の侵略反革命を撲滅し全世界の帝國主義を打倒せよ！ スターリン主義との国際党派開拓を継承し 世界プロレタリア革命一歩づきずきに進む 国際社会主義の最前線をめざす

88年の世界と日本の
政治をふりかえって

各号の内
容

- ◆国際連帯の大きな一步 P8~9
◆88年烽火掲載文章一覧 P10

1988年
12月1日
第401号
編集発行人 高木一夫
一部 200円



共産主義者同盟（全国委員会）

■ 大阪戦旗社 大阪市大淀区本庄西2-8-19
明豊ビル401号 大労協内
TEL.(06)371-3706

○郵便振替 大阪3-63333 高木一夫
○銀行口座 第一勧銀 515-1058150 高木一夫

米ソ協調について第三世界 で持続拡大した革命運動



(韓国・6月) ▶



(チリ・10月) ▶

しかしこうした「和平」や「和解」の背後で、国際帝国主義は第三世界人民に対する収奪と抑圧を強め、第三世界の貧困と社会的矛盾がますます拡大したことでもまた事実であった。国際帝国主義と、これに従属する腐敗した政権に対するたたかいが、全世界で持続し、成長した。八八年にはニカラグア、フィリピン、ビルマ、チリ、イスラエル占領地区などを先頭に革命運動・人民闘争が高揚し、資本主義国として急速に発展する韓国では階級闘争が本格的に幕を開けた。

今年一年の世界と国内で起きた主要な出来事を振り返り、今日の時代の特徴を鮮明にし、われわれのたたかいを前進させていく一助としていたい。

(次ページにつづく)

88年の世界と日本の 政治をふりかえって



米ソ首脳会談(5月)

何を求めているか

復権せよ！

烽 火

八八年の国際政治において、もっとも注目を集めた出来事の一つは、米ソ首脳会談であった。レーガンがモスクワを訪れ、五月二九日から六月一日にかけて、ゴルバチョフとのあいだで米ソ首脳会談がおこなわれた。この会談においてINF（中距離核戦力）全廃条約の批准書が交換され、条約は正式に発効した。そのほか、「軍縮・地域紛争・人権・二国問題」などをめぐって会談はおこなわれた。今回の首脳会談で最大の焦点とされていた戦略核半減条約問題に関しては大きな進展はみられなかつたが、さらに交渉を続けるという確認が交わされた。

米ソ首脳会談は大がかりなショードであった。かつてソ連を「悪の帝国」とのしつたレーガンは終始笑みをたやすく、あたかも平和と友好の使者であるかのようにふるまつた。ゴルバチョフは米ソ関係が正常化され、健全になったことをソ連人民に強調した。この会談によって米ソ間の緊張緩和は促進され、米ソは「平和共存」（ゴルバチョフはこの言葉を共同声明のなかに入れることを提案したが、レーガンはあいまいな要素があるという理由でこれを拒否した）にむかって新しい一步を踏みだした。

しかし米ソのこのような新しい「和解」は、世界のプロレタリアート人民の闘争に積極的役割をはたすものではない。新しい「和解」は、米ソそれぞれの国内的要因、とりわけ双方の経済的危機・不振に規定された妥協の産物であるが、これによって帝国主義による国際階級闘争、とくに第三世界の反帝民族解放闘争に対する反

●88年の世界と日本の政治をふりかえって

1.

帝国主義に屈服して世界の革命運動への支援を放棄するソ連・中国

八八年の国際政治において、もっとも注目を集めた出来事の一つは、米ソ首脳会談であった。

米ソの新たな「平和共存」

レーガンがモスクワを訪れ、五月二九日から六月一日にかけて、ゴルバチョフとのあいだで米ソ首脳会談がおこなわれた。この会談においてINF（中距離核戦力）全廃条約の批准書が交換され、条約は正式に発効した。そのほか、「軍縮・地域紛争・人権・二国問題」などをめぐって会談はおこなわれた。今回の首脳会談で最大の焦点とされていた戦略核半減条約問題に関しては大きな進展はみられなかつたが、さらには交渉を続けるという確認が交わされた。

米ソ首脳会談は大がかりなショードであった。かつてソ連を「悪の帝国」とのしつたレーガンは終始笑みをたやすく、あたかも平和と友好の使者であるかのようにふるまつた。ゴルバチョフは米ソ関係が正常化され、健全になったことをソ連人民に強調した。この会談によって米ソ間の緊張緩和は促進され、米ソは「平和共存」（ゴルバチョフはこの言葉を共同声明のなかに入れることを提案したが、レーガンはあいまいな要素があるという理由でこれを拒否した）にむかって新しい一步を踏みだした。

しかし米ソのこのような新しい「和解」は、世界のプロレタリアート人民の闘争に積極的役割をはたすものではない。新しい「和解」は、米ソそれぞれの国内的要因、とりわけ双方の経済的危機・不振に規定された妥協の産物であるが、これによって帝国主義による国際階級闘争、とくに第三世界の反帝民族解放闘争に対する反

新しい「平和共存」が国際階級闘争の利益とまったくあい入れないことは明らかである。

今回の首脳会談期間中の次の出来事は、今日の状況をよく反映している。レーガンはモスクワ大学でおこなった学生との対話のなかで厚かましくも次のように述べた。「キューバの三、

四万人の兵力がアンゴラに展開しており、内戦で独裁政権を助けていた。またニカラグアでは現政権が言論や選挙の自由がないがしろにしている。大切なのは、外国の干渉ぬきで、その國の市民たちが自分たちのことを、自分で決められるようになることだ」（五月三一日）。レーダンはキューバやニカラグアに対し、このような誹謗・中傷をソ連国内で公然とおこなつたが、この演説を用意し、レーガンに言いたい放題を許したのはばかりぬソ連指導部であった。

開放や「改革」の政策は、一国の生産力の発展それ自身を自己目的化したものであり、それらの国々の革命の前進、全世界の階級闘争の前進に何ら役立つものでなく、むしろその阻害要因になっている。国内では経済的効率の高度化を、対外的には自国生産力の拡大のための平和的国際環境づくりを何にも優先する基準とする政策は、それらの国のプロレタリアートの階級意識を希薄にさせ、国際的には、社会主義の権威を大きく低下させる役割をはたしている。八八年にはソ連・中国のプロレタリア国際主義への裏切りと敵対はますます鮮明になった。

ソ連・東欧諸国では「新しい思考」と呼ばれるイデオロギーが強まつた。それは帝国主義との「平和共存」を、革命を防衛するための一時的方策ととらえないので、現代革命の普遍的原理にしようというイデオロギーである。これを代表するのがゴルバチョフの「全人類的価値優先論」である。ゴルバチョフは、彼の著書「ペレストロイカ」のなかで次のように述べている。「レーニンは全人類的利益が階級的利益に優先するという考え方を一度ならずのべた。われわれは、こうした考え方のあらゆる深みと意義をいま理解したのである。それらは、国際関係についてのわれわれの新しい哲学、新しい思考を育んでもいる」。「全人類的価値優先論」は、帝国主義と協調することが何か歴史の進歩であるかのように合理化し、これを社会主義の世界観として扱われた。

プロレタリア国際主義が完全に放棄されるなかで、四月にアフガニスタン和平問題での全面的合意がなされ、五月にはソ連兵のアフガニス

帝国主義の側の動向を次にみておこう。帝国主義をめぐるここの数年の情勢は以下の点にある。①帝国主義陣営の機軸国であったアメリカの経済的力量が大きく低下したこと、②日本・西ドイツの国際的な地位が相対的に高まること、③帝国主義間の対立がますます激しくなっていること、④帝国主義の新しい同盟関係の再編が始まること、⑤ソ連・中国のいつそくの変質をしてソ連・中国との「和解」

である。このとき共産党には、被抑圧民族に対する権利の侵害、抑圧民族の特權と被抑圧民族への蔑視、これらとの闘争を再組織して諸民族の眞の連帯と融合をかちとることが問われていた。しかしソ連指導部は民族問題発生の原因を「地方の当局者がペレストロイカに反対して腐敗を続けてきたことにある」(ゴルバチョフ)と御都合主義的に解釈し、ペレストロイカを徹底させることが問題の解決の道だとしたのである。そして当然にも彼らは、官僚的行政的にその鎮静化をはかることができなかつた。

東欧諸国でもまったく同様のことが起つた。六月には、ハンガリーで反ルーマニアの五万人規模のデモが発生し、九月にはユーゴスラビアでも国内のセルビア人に対する抑圧反対の動きが顕在化した。前者の場合、ルーマニアに住むハンガリー系住民を、ルーマニア政府が「農工業センター」を建設するために立ち退かせたことを発端にしている。東欧に吹いたペレストロイカの風が、東欧諸国の民族問題に火をつけたが、各国の指導部は、民族的対立を階級的に解決するのではなく、いつそうそれを激化させただけだった。

2. 米帝のL-I-W戦略を筆頭にして 強まつた第三世界革命への攻撃

が進んだこと、⑥第三世界の反帝民族解放闘争圧殺の攻撃が一段と強化されていること——以上である。

カリツアがしめしたもの

これらの帝国主義の動向をもつとも包括的に示したのが、六月にカナダのトロントで開かれた一四回目のサミット(先進国首脳会議)である。

ソ連国内で民族問題が激化したこと、今年の大好きな特徴であった。一月には、アゼルバイジヤン共和国ナゴルノカラバフ自治州で、アルメニア系住民がアルメニア共和国への編入を要求して大規模なデモをおこなうなど、各地で民族問題が顕在化した。それは長年潜在化していた少数民族の要求が、言論自由化などソ連社会の転換を条件にして一気にふきだしてきたものである。このとき共産党には、被抑圧民族に対する権利の侵害、抑圧民族の特權と被抑圧民族への蔑視、これらとの闘争を再組織して諸民族の眞の連帯と融合をかちとることが問われていた。

しかしソ連指導部は民族問題発生の原因を「地方の当局者がペレストロイカに反対して腐敗を続けてきたことにある」(ゴルバチョフ)と御都合主義的に解釈し、ペレストロイカを徹底させることが問題の解決の道だとしたのである。そして当然にも彼らは、官僚的行政的にその鎮静化をはかることができなかつた。

東欧諸国でもまったく同様のことが起つた。六月には、ハンガリーで反ルーマニアの五万人規模のデモが発生し、九月にはユーゴスラビアでも国内のセルビア人に対する抑圧反対の動きが顕在化した。前者の場合、ルーマニアに住むハンガリー系住民を、ルーマニア政府が「農工業センター」を建設するために立ち退かせたことを発端にしている。東欧に吹いたペレストロイカの風が、東欧諸国の民族問題に火をつけたが、各国の指導部は、民族的対立を階級的に解決するのではなく、いつそうそれを激化させただけだった。

時代はわれわれに

国際主義を



トロント・サミット(6月)

つた。

七年から開始されたサミットは、当初、七年のドル危機に示された資本主義体制の危機に対応して、経済問題の協議を中心にして出発したが、回を重ねると政治的性格の強いものになってしまった。そうなった最大の要因は、

第三世界からわき起り続けた反帝民族解放闘争の前進である。そして帝国主義の側がもはや米帝一国で対応できなくなり、共同で対処していくことをますます強く迫られるようになつたことにある。

今回のトロント・サミットでは政治問題が後景化し、経済問題が中心となつたといわれた。しかしそれは、これまで対ソ対決の推進を大きな政治課題とせざるをえなかつた帝国主義の側に一定の余裕がでてきていること、またこれとは逆に、世界資本主義の土台を搖るがすような経済的諸問題が山積みになり、帝国主義はいやがおうでもこれらの問題の協議に時間をさかなければならなかつた、ということ以上を意味しない。現に「経済中心」という陰にかくれて帝国主義諸国はトロント・サミットでも、これまでにやらない危険な内容を合意したのである。

政治宣言では、ソ連のアフガニスタンの撤退やINF全廃条約締結が「西側諸国との断固たる態度と团结の直接的結果」であると総括され、ひき続き西側諸国の同盟を強化すること、「核抑止力と十分な通常戦力」の維持をはかることが主張された。また米帝・レーガンはフィリピンやアフガニスタンなどへの戦略的援助を強化することをくり返し訴えたが、それを受けける形で政治宣言・経済宣言の双方に、「地域紛争」と呼ばれる第三世界の革命運動に対する反革命的介入を強化していくことが盛りこまれた。とりわけ注目しておかなければならないことは、日帝がみずから進んで帝国主義内の国際的な責任を分担し、とりわけアジアで米帝の後退を補完しつつ、米帝に代わる盟主として登場することを宣言したことである。日帝・竹下は、政府

開発援助費＝ODAの倍増を約束し、ソウル・オリンピックの成功支援、フィリピン・アキノ政権への参入などを主張した。

始まつた軍事戦略の転換

アメリカ・日本・ECUを三極とする帝国主義の同盟関係はいま新しい再編・強化の過程に入った。そしてそのキャステイングボードは、いぜん米帝によって握られている。米帝は本年に入って発表したいくつかの公文書のなかで、彼らの新しい世界戦略を発表している。それは当然のことながら、帝国主義反革命同盟の共通戦略を大きく規定するものとなる。

概説的について、米帝の世界戦略を支える政治的には何ら変化はないが、米帝の狭義の軍事・政治戦略には変化が起こり、これまでの欧洲を第一戦線とした対ソ対決の政治軍事シフトから、第三世界の革命運動をたきつぶすための政治軍事シフトへの移行が開始されている。米帝は、これまで対ソ対決のためにもいちいられてきた膨大な軍事力の削減を進めながら、かぎられた自己の力を國際帝国主義にとっての真の敵である第三世界の反帝民族解放・社会主義革命運動の制圧に集中しようとしているのである。

一月、米帝は今後二〇年間を展望した「アメリカの国家安全保障戦略に関する研究報告」を発表した。「選択的抑止」と名づけられたこの報告書は、「ソ連拡張主義」との対抗をひき続

き強調する一方で、ソ連が従来の政策を改めようとする徵候があらわれていると分析しながら、次のような結論を導いている。「われわれは、おそらくソ連の周辺部のさまざまな地点において、ひき続きソ連の挑戦を受けるであろうが、それだけでなく、第三世界における広範な挑戦を覚悟しなければならない」「第三世界における紛争は米ソ間に予想されるいかなる戦争よりも脅威の度合いが小さい。だがそれらの紛争は、われわれの死活に関わるものとともに重要な国益を守るわれわれの能力を掘り崩す危険をはらんでいる」「選択的な非核戦力を必要なときに必要な場所に展開できるよう、能力を多様化し強化し、…最新の精密技術・情報技術を活用しなければならない」。

米帝には、第三世界の反帝民族解放・社会主義革命を鎮圧する特別の戦略が必要になった。この軍事戦略こそ、「政治的・経済的・心理的・軍事的戦争を含む全面（統合）戦争」といわれ、L·I·W（低水準戦争）と定式化された反革命軍事戦略である。経済危機にあえぎながらも、なお世界の覇者の地位を保とうとする米帝のこのような新たな戦略のもとに結束し、「責任分担」をもつて同盟関係を再編・強化していくことを帝国主義の側は急いでいる。一月、アメリカ大統領選で共和党のブッシュが当選した。

「レーガン政治の継続」をうたうブッシュ新政権のもとで、以上のような米帝の新しい世界戦略は、ますます強力に推進されていくだろう。

3. 第二世界を先頭に燃え広がった 革命運動と人民の英雄的な決起

米帝の反革命と抑圧の強化、ソ連・中国の革命運動への援助の放棄という事態のなかで、第三世界において今年もまた大きな事件が起こり、そして人民の偉大な闘争がたたかわれた。

■ 中南米

ニカラグアでは、米帝による反革命ゲリラ・コントラ支援をはじめとした革命の包囲・圧殺の攻撃をうち破って、ひき続き革命は前進した。九年間で五万二〇〇〇人以上のぼる戦死者、国家予算の五〇%を占める軍事費、年率一三〇〇%ものインフレ（本年はじめ）などに示される困難のなかで、ニカラグア革命は社会主義をめざして力強く進撃している。七月の革命九周年記念の演説でオルテガ大統領は、「一九七九年七月十九日以来、ニカラグアには社会主義が存在している」と宣言し、その発展を全人類に呼びかけた。中南米を自分の裏庭とみる米帝にとってニカラグア革命は、中南米の新植民地主義支配を穢るがす大きな脅威であり、最大級の力量を投入してその圧殺をはかつてき。本年

三月には、ニカラグア政府軍によってコントラが壊滅的打撃を受けるなかで、米帝はその防衛のために急きよホンジュラスに米軍三八〇〇名を派兵するという異常をおこなった。

同じ中米に位置するパナマでも、米帝の支配と権威は大きく揺らいだ。パナマでは二月に政変が起こり、ノリエガ国軍総司令官が親米派のデルバイエ大統領を追放し、政治の実権を完全に掌握した。かつては米帝と親密な関係にあつたノリエガの反抗をたきつぶし、パナマの支配を死守するために米帝は経済封鎖をおこない、米兵を増派して強力な圧力をかけた。しかし、パナマ人民の強い抵抗や、中米周辺諸国政府の「アメリカの内政干渉反対」「経済制裁反対」の態度表明のなかで、米帝はノリエガをついに打倒することができなかつた。

一五年間にわたってピノчет政権による軍事独裁が続いているチリでは、ピノчет政の任期を来年からさらに八年間延長するかどうかの是非を問う国民投票が一〇月におこなわれた。軍政集会も開かれており、高まる反軍政の声の

中東でも、歴史的な出来事がいくつか起こった。

■ 中東

第一は、イスラエルが不正にも占領するガザ、ヨルダン川西岸の両地区で、パレスチナ人民による反イスラエルの決起が、昨年一二月から開始され、いまなお持続していることである。これに対してイスラエルは報復的な弾圧を加え、三〇〇人以上の人々を虐殺した。「インテファード（蜂起）」と呼ばれるパレスチナの青年労働者・学生を中心としたこの決起は、広範な支持と共感を呼び起こし、一月にはイスラエル国内でも、「占領反対」を主張する五万人のデモがおこなわれた。たたかいの高まりを背景にして、パレスチナ民族評議会（PNC）は一月、パレスチナ独立国家の樹立を宣言した。

第二は、イラン・イラク戦争が八年ぶりに終結したことである。四月にイラン艦艇を破壊し、七月にはイラン旅客機を撃墜するという、米帝のイランに対する直接的な軍事攻勢がかつてなく強められていくなか、突然イランは七月に国連停戦決議を無条件で受諾すると表明し、八月には停戦が発効した。新聞報道によれば、戦争によるイラン側の損失は、五〇三三億ドル、死傷者は七五万人にものぼった。この戦争は、世界の人民を何ひとつ励ますこともなかつたし、歴史の発展にも何ら貢献しなかつた。イラン革命の成果を独占したイスラム主義者たちは、聖戦を唱えて膨大な人民を無益な戦争にかりだし、



米軍の侵攻に備えパナマ市で訓練をする志願兵（4月）

いたずらに国土を戦火で荒れるにまかせた。イラン・イラク戦争の終結を、イスラム革命の防衛とイスラム主義による人民支配の永続化のために利用させることなく、反帝民族解放・社会主義革命にむかうたたかいの序幕に転化していくことが要求されている。

第三は、アフガン和平の全面合意とアフガニスタンからのソ連軍の撤退である。四月、アフガン和平意文書の調印式が、ジュネーブで開かれ、パキスタン、アフガニスタンの両当事者国、および協定保証国としての米ソによって調印された。この合意文書にもとづいて五月一五日からソ連軍の撤退が開始された。ソ連の発表によれば、アフガニスタン駐留ソ連軍の死傷者は四万九〇〇〇人、戦死者は一万三〇〇〇人にのぼるということである。アフガン和平合意とソ連軍の撤退開始は、五月末からモスクワでおこなわれた米ソ首脳会談へのソ連側からの手みやげであり、「米ソ・ニューデタント（新しい緊張緩和）」の幕開けを意味した。

■ アフリカ

アパルトヘイト（人種隔離政策）が続く南アフリカでは二月、政府によって、統一民主戦線（UDF）など一八の反アパルトヘイト運動の組織の活動が禁止され、最大の黒人労働組合である南ア労働組合会議（COSATU）の活動が制限されるという弾圧がおこなわれた。他方、六月にはボタ大統領が黒人閣僚の登用の意向を表明するなど、「改革路線」といわれる懷柔策もいくつか具体化されている。しかし多くの黒人労働者たちは、このペテン的策動を許さず、アパルトヘイトそのものを必要とする体制の根底的変革をめざしてたたかい続けている。五月に開催されたアフリカ統一機構（OAU）は、首脳会議開催に先立ち「南アのアパルトヘイト政策が本質的に暴力的な性格を持ち、暴力によって支えられている以上、武力闘争への転換が必要」として、南アのたたかう非合法組織であるアフリカ民族会議（ANC）などへの支援を約束した。なお二月の発表によれば、八七年度の日本の対南ア貿易額は四二億七〇〇〇万ドルにのぼり、アメリカを抜いて第一位になった。南アにおいても日帝は、人民の解放闘争への直接的な敵対者として登場しつつあることを全世界の前にさらけだした。

八月には、アンゴラ、キューバ、南アフリカ、アメリカの四カ国は、アンゴラ内戦の即時停止とナミビアに駐留中の南ア軍が全面撤退をすることで合意したとの報道がおこなわれた。一ヶ月には、アンゴラ駐留のキューバ軍全面撤退、ナミビア独立などを決めたアンゴラ包括和平案が関係諸国によって受諾された。この和平案は必ずしもアンゴラ・キューバ側に有利な内容になっているものではないが、いざれにせよキュ

バーンからソ連軍の撤退である。四月、アフガン和平安意文書の調印式が、ジュネーブで開かれ、パキスタン、アフガニスタンの両当事者国、および協定保証国としての米ソによって調印された。この合意文書にもとづいて五月一五日からソ連軍の撤退が開始された。ソ連の発表によれば、アフガニスタン駐留ソ連軍の死傷者は四万九〇〇〇人、戦死者は一万三〇〇〇人にのぼるということである。アフガン和平合意とソ連軍の撤退開始は、五月末からモスクワでおこなわれた米ソ首脳会談へのソ連側からの手みやげであり、「米ソ・ニューデタント（新しい緊張緩和）」の幕開けを意味した。



活動禁止の弾圧に抗議する南アの黒人労働者(2月)

■ 東アジア

まだ第一にふれておかねばならないのは朝鮮半島情勢であり、韓国の労働者人民の爆発的なたたかいである。韓国では昨年、六月闘争を頂点にして反独裁闘争がかつてない高まりを示した。もはや旧来の手法では支配を維持できないことを知った韓国支配者階級は、軍事独裁支配から議会制民主主義を軸とした人民統治への転換を開始した。それは一面では、人民のたたかいで強制した結果であるが、同時に、急速に発展し、力をたくわえた韓国資本主義とブルジョアジーみずからが必要とした選択にもとづいたものである。韓国の労働者人民は、反独裁民主化を全人民的政治課題として掲げた時代に入りつづる。韓国においてもブルジョアジーとプロレタリアートのあいだの矛盾は、絶対にあいいれないものとして誰の目にも明らかになってきた。

さて本年の韓国の政治は、大韓機事件の主役とされた金賢姫の記者会見（一月）、盧泰愚の大統領就任（二月）というブルジョアジーの側の攻勢が始まった。しかしそれもつかのま、人民の側の反攻がすばらしい勢いで開始される。四月の総選挙では大方の予想を裏切って、与党民正党が過半数の議席を獲得できず、金大中氏の平民政黨が野党第一党におどりでた。民衆の利



銃口を向ける政府軍に立ちむかうビルマ人民(8月)

益擁護を主張する「民族民主勢力」の奮闘がこれらの背後には存在した。五月に入るとソウルオリンピック単独開催反対・南北統一を掲げた学生運動が急速に高揚していく。それはオリンピック開催中までときれることなく継続する。南北統一運動は民族運動であるが、それは被抑壓人民の利益を代表しようとする運動であり、運動が急速に高揚していく。南北統一運動が高揚した時期、大宇や現代や国鉄の労働者たちは大規模なストライキをうちねいた。

オリンピック後、全斗煥の光州虐殺と全斗煥一族の不正蓄財を追求し、全斗煥夫妻の逮捕・処罰を要求する運動で、再び韓国は沸騰している。休むことなく継続する闘争の成果を、韓国進、そしてプロレタリアートの階級的成長、階級闘争の前衛党建設に結びつけていくことが、本格的に要求されはじめている。

朝鮮半島とならんと、ことし東アジアでもつとも注目を集めたのはビルマである。

一六年間にわたって独裁支配をしてきたビルマのネ・ウイン体制は、反政府闘争の爆発によって、崩壊の崖っぷちに立たされた。ネ・ウイン体制とは何か。それは一般に「ビルマ式社会主義」と呼ばれてきた。一九六二年にクーデターによって権力を握ったネ・ウインに率いられた革命評議会は、その一ヵ月後に「社会主義へのビルマの道」を発表し、社会主義の建設をうちだした。その内容は、金融・鉱業・通信・流通部門などの国有化と統制経済、および社会主義計画党（BSPP）を单一政党とする政治制度であった。しかしその実態は、ビルマ経済のなかで大きな位置を占めていたインド人・中国人の経済的実権を奪い、「経済のビルマ化」と称して一部の軍人の手に富を独占させる構造をつくりだし、さらに労農人民の政治への参加を遮断するというものであった。「ビルマ式社会主義」は、階級の廃絶をめざす社会主義では決してなく、それはナショナリズムの別名であつた。

り、軍部独裁の隠れみのにすぎないものであつた。

七〇年代に入ると「ビルマ式社会主義」は破綻を示し始め、七六年の臨時党大会でネ・ワインは海外からの援助の積極的導入による改革を提起した。しかしそれは矛盾をいつそう拡大させただけだった。世界的な第一次産品の価格低下とともにあいまって、八〇年代に入るとビルマ経済の危機は加速された。鉱工業生産は低下し、米の生産は停滞し、かつて世界最大の米の輸出国であったビルマは米の輸入国に転落した。現在、累積債務は四〇億ドルに達し、外貨準備高は五〇〇〇万ドルを切った。国民の年間平均所得は一九〇ドルにすぎない。国連は八七年未、ビルマを「最貧困(LSLDC)」に認定した。

未曾有の経済危機を背景にして、まず学生を中心に行政府運動が開始された。三月と六月に首都ラングーンで大規模なデモがおこなわれ、運動は全国に波及し、それは労働者・市民のなかにも広がっていた。七月、BSPP臨時党大会でネ・ワインが議長を辞任、代わってセイン・ルインが議長に就任した。八月、各地で運動が激化するなか、新しくマウン・マウンが議長についた。九月、全国ゼネストに三〇〇万人が参加するという情勢におされ、BSPPは再び臨時党大会を開き、複数政党制への移行と総選挙実施を決定した。しかし九月一八日、ソウ・マウン国防相による軍事クーデターが発生し、反政府勢力への一斉弾圧が開始された。たかはいはいったん鎮圧されて現在に至っている。ネ・ワインはBSPPの議長を退いたが、ネ・ワイン体制は形を変えて生き残った。そしてこれを経済的に支えているのが日本帝国主義である。ビルマへの最大の援助国は日本で、ビルマに対する二国間援助の約六〇%を占めている(一位は西ドイツで約一五%)。七月のBSPP臨時党大会でネ・ワインが辞任し、外国との合弁企業制実施などを柱とする「開放政策」を決定したのも、日本政府からの強い圧力を受けたことであった。

4. 「世界に貢献する日本」の旗掲げ 侵略反革命戦争準備進めた日帝

日本のこの一年の政治動向について概括すると、要するに日帝の海外侵出が急速に拡大し、世界屈指の経済力にものをいわせて米帝の肩代わりが進み、国内では安保強化と軍備拡大、排外主義と治安弾圧の強化が進行し、侵略反革命戦争の準備が着実におこなわれたということである。

今年のおもな出来事を簡単にふり返っておきたい。

日帝の経済力はひき続きめざましい伸びを示した。

問題がまったく解決されずにむしろ深刻化し、暴力によって人民の不満がおさえつけられるだけなので、たたかいが再び発生するのを避けられない。そのとき、九・一八クーデターをいつたんは許した反政府勢力内部の先進的部分が、権力打倒の展望を鮮明にし、ブルジョア民主主義の要求へとたたかいをねじ曲げようとする部分と闘争し、反帝民族解放・社会主義の方に向へと人民を領導することができるかどうかが、勝利の鍵を握るといつて過言ではないだろう。

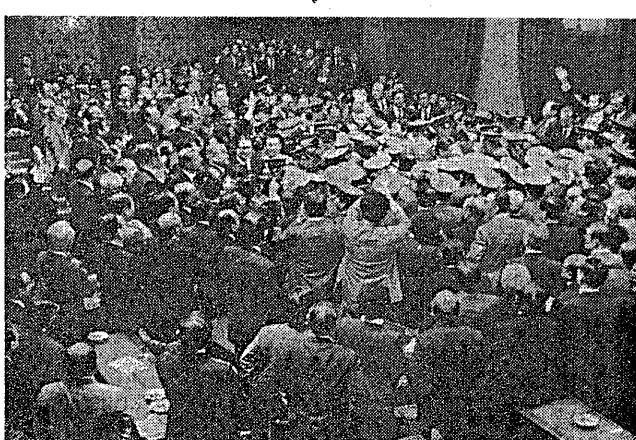
反帝民族解放・社会主義革命の東アジア最大の拠点であるフィリピンでは、四月からアメリカ・フィリピン基地交渉が始まった。フィリピンには極東最大の米空軍基地クラーク基地、および世界最大の海軍補給部門をもつスピック米海軍基地という二つの大きな米軍基地が存在している。九一年には基地の使用を決めた米基地協定が期限切れを迎える。アキノ政権はアメリカから基地使用料の増額と経済援助の拡大を引きだすために、また米帝は在比米軍基地を九年以降も存続させるためにこの交渉にのぞんだ。一〇月には、基地使用料を現行年間一億八〇〇〇万ドルから四億八一〇〇万ドルに引き上げるなどを合意して交渉は終結した。米帝の「同盟戦略」や、対比一〇〇億ドル多国間援助構想(九〇年度から五年間)などを思いだすまでもなく、この合意の実施にあたって日本が強力な役割をはたすであろうことは疑いない。

基地存続・強化の動きに反対して、フィリピン国内では米軍基地撤去を要求する反基地闘争が相次いだ。また六月には上院で三つの非核法案が通過した。こうした反米反基地の高まりと結びついてフィリピン革命勢力は、アキノ政権による地下組織の解体、活動家の不当逮捕・虐殺などの激しい弾圧にもかかわらず、今年も着実な前進をかちとった。

そのほか、東アジアではカンボジア問題をめぐる政治交渉が一定の進展をみせ、七月にはインドネシアのジャカルタで「カンボジア全当事者会談」が開催された。

五月の発表によれば、日本の対外純資産残高(対外債権から対外負債を引いたもの)は八七年末で二四〇七億ドルに達し、三年連続で世界一となつた。日本の対外債権が急速に膨張したのは、おもに米国債などへの対外証券投資が急増したことによるが、同時に工場進出など海外への直接投資も近年急速に増加し、六月の発表では、八七年度の対外直接投資は三三三億ドル(前年度比四九%増)の過去最高を記録した。とくにアジアむけ投資は額にして前年度の一・一倍という急増ぶりを示した。七月、アメリカ

「世界に貢献する日本」の旗のもとで、侵略反革命戦争出動にそなえた日米安保の強化と軍備増強が着実に進められた。防衛負担の増加を求める米帝の対日要求がしつように��くながで、日米安保は即戦体制として強化された。一月におこなわれた日米防衛首脳会談では、「日本有事のさいの米軍来援を円滑にするための研究」、いわゆる有事来援に関する共同研究をおこなうことが日米間で合意された。NATOなみの軍事同盟へと日米安保を再編しようとする動きの一つである。八月、アメリカの経済面での地位



衆院税特委で自民党が消費税導入などを強行採決(11月)



Xデー攻撃と対決してかちとられた反京都国体闘争(10月)

(7) 1988年12月1日

火 焰

判に対する（殺す）と叫んでおしかけ、被告・支援者への襲撃をくり返した。

九月、天皇の「病状悪化」のニュースとともに、天皇Xデー攻撃が開始された。マスコミは完全な統制下におかれ、連日、天皇キャンペーンがくり広げられ、行事・イベントの自粛が強制され、天皇の戦争責任や天皇制に対する批判への圧力が強められた。天皇の死を利用して天皇制を強化し、排外主義のもとへ人民を統合していくこうとする攻撃とのたたかいは、八八年から八九年にかけてのわれわれの最大の闘争課題となるだろう。

敵の側は、「極左暴力集団等の動向と警察の対応」という特集を組んだ八八年版警察白書（七月）や、三里塚一期着工攻撃、国家秘密法制定策動、拘禁二法制定策動に示されるように、革命運動と階級闘争に対する攻撃をいつそう強めてきている。

こうしたなかで、労働運動においては八九年秋、帝国主義ナショナルセンター結成のコースが確定し、総評は七月の大会で解散を決定した。戦後階級闘争において主流派的位置を占めてきた社会党の右転落が開始され、これを批判する共産党も小ブルの党に純化していく。労働運動の右傾化と階級政党不在という状況のなかで、人々は共産主義や階級闘争からますます切斷されるようになつた。他方、市民運動として原発や基地に対する闘争が全国各地で高揚した（日本の党派の状況と批判、労働運動、諸闘争の評議などについては、あらためて提起しない）。

第三に、社共に代わる前衛党を建設していくことである。すべては党建設が決定する。国际主義の精神にあふれ、広範な労働者大衆により開まれ、情勢を革命的に切り開くプロレタリアートの前衛党の登場が待望されている。わが同盟を強化し、不抜の前衛党の建設を急がねばならない。

以上、簡単に今年一年の世界と日本の政治を回顧したが、ここからわれわれは次の任務の重要な性を再度強く確認しておかねばならない。

第一に、プロレタリア国際主義を放棄したソ連・中国共产党を批判し、世界党建設をも展望に入れて、プロレタリア国際主義を復権し、全世界の共産主義者と革命運動の国際的結合を再建していくことである。これなくして全世界の反帝民族解放・社会主義革命の前に立ちはだかる厚い壁は突破できないし、また、国際主義と結びつくことなくして帝国主義国内階級闘争の発展はありえない。

第二に、八九年秋に官民合同の帝国主義ナショナルセンターが発足し、総評が解散するといふ情勢のなかで、階級闘争の基礎陣形としての階級的労働運動のさらなる発展をかちとっていることである。プロレタリア大衆的政治闘争の組織化を武器に、帝国主義ナショナルセンターの内外を貫いて、労働者大衆を革命の側に獲得していくための努力が新しく開始されねばならない。

反帝民族解放・社会主義革命の前に立ちはだかる攻撃事件に続き、赤報隊を名のる朝日新聞社の攻撃が東京本社（一月）、静岡支局（三月）

冬期カンパを訴える

全国のたたかう労働者・学生のみなさん！

八年もおしまり、新しい年がやつてこようとしている。この一年、国際的には米ソ・ニューデータントが本格化して国際階級闘争の側はいつそうの苦闘を強いられた。国内では天皇Xデー攻撃をはじめとした排外主義の政治攻勢が一段と強まつた。われわれは、ソ中既成社会主義によるプロレタリア国際主義の完全放棄を批判し、国際主義を復権していくことこそ、国際・国内階級闘争の現状を大きく変革していくための緊要の課題であるところから、この一年間、フィリピン革命連帯をはじめ、国際連帯闘争の前進のために力を注いできた。しかしあれわれの力はいまだ小さく、階級闘争の要請に十分に応えきっているとはいえない。きたる八九年、天皇の死と

もにXデー攻撃が本格的に開始され、総評が解散して帝国主義ナショナルセンターが結成され、日帝の侵略反革命戦争準備がいつそ激化するという情勢をみすえて、われわれはプロレタリア国際主義の旗をさらに高く掲げ、党建設、政治闘争の組織化、労働運動をはじめとした諸闘争の組織化に奮闘しない。

立ち遅れを克服するために全力をあげる決意である。この日本の地で、社共にかわる眞の陣形を獲得し、第三世界革命運動に連帯して日帝打倒をめざす国際主義的な政治闘争を組織するという革命の事業を前進させるために、全国の労働者・学生諸君にわが同盟への結集と圧倒的なカンパを訴える。

国際連帯の大きな一步

アジア労働者情報交流センター・関西(準備会) 結成される

11・2

一月一日 大阪市立労働会館で、
アジア労働者情報交流センター・関
西(準備会)の結成集会が、四〇団
体約一〇〇名の労働者の結集でかち
とられた。

立ち遅れの克服めざし

今年五月一日、自立労働組合連合
の伊藤氏とUNIONひごろの西浜
氏の連名で相談会の呼びかけがなさ
れ、アジア労働者情報交流センター
・関西(準備会)は、結成にむけて
のスタートを切った。



関西各地の労組代表や活動家が結集してかちとられた準備会結成集会

闘う労組が 広範に参加

草の根からの国際連帯

政府や資本の側からの排外主義攻撃
に合流し、企業防衛のためにアジア
諸国への侵略を支持し、安保と自衛
隊の強化を支持する動き、さらには、
アジアからの出稼ぎ労働者に対しても、
同じ労働者として連帯していくので
なく、逆に日本人労働者のなかか
ら彼らを排斥していくとする動き
すら始まっているなかで、このよう
な排外主義攻撃を打ち破り、政府と
資本に対して最後までたたかう力を

それは、次のような認識にもとづ
いてなされた。今日、日帝はアジア
各国に対して膨大なODA(政府開
発援助)をばらまき、各国の反動政
権に援助をあたえ、一方でアジア諸
国労働者人民を日本とは比べものに
ならない低賃金と劣悪な労働条件の
もとでこきつかい、膨大な利益を得
るとともに、急速に増える日本の海
外権益を防衛するために、自衛隊の
海外派兵さんとしている。さら
に、すでに一〇万人に達しようと
するアジアからの出稼ぎ労働者が、
日本において日本人労働者よりも
かに低い賃金と劣悪な労働条件下で
働くかされ、労働基準法にもとづく労
働者としてのあたりまえの権利すら
何ら保障されず、非合法化に置かれ
ている。資本の側の急速な「国際
化」に比べて、たたかう労働運動の
側の対応はきわめて立ち遅れている。

情報交流センター・関西(準備会)
の結成が実現されたのである。準備
会に参加する団体は以下のとおりで
ある。日放労関西支部・UNION
ひごろ・自治労大阪府職總務支部・
北摂トータルユニオン・全国金属西
成地域合同支部・全国一般ヨネミヤ
労組・自立労働組合連合・大阪電通
合同支部・大阪郵政自立共生労働組
合・南労会労組松浦分会・総評全日
本建設運輸連帯労働組合関西地区生
コン支部・関西労働者安全センター
(一〇月一二日現在・順不同)。

労働運動のなかに作り出していった
ために、アジア諸国労働者と日本の
労働者の国際的連帯を発展させるこ
とが不可欠なものとなっている。とい
う認識である。

呼びかけが発せられて以降、数度
の相談会が関西の多くの労働組合と
労組活動家の参加のなかでおこなわ
れ、準備会の結成にむけた準備が進
みられ、一月一日にアジア労働者

の相談会が関西の多くの労働組合と
労組活動家の参加のなかでおこなわ
れた。最初に国際連帯運動を
作っていくためにセンターを育てて
いこう」と司会から開会が宣言され、
集会は始まった。最初に国際連帯運
動をおし進めていた各団体からの連
帯のあいさつがおこなわれた。アジ
アソフレンドの水野氏は「アジアか
らの出稼ぎ労働者は合法化され

る必要がある」とのべ、センターの
正式結成にむけてさらに頑張るとい
う決意が表明された。そして参加者
の満場の拍手で、運営要項・活動方

ジアからの出稼ぎ労働者は労働者に
国境がないことを突きつけていた
との発言があり、また出稼ぎ労働者
の合法化にむけた法務省に対する公
開質問状への協力が呼びかけられた。
続いて「アジア女子労働者交流セ
ンター」と「フィリピン解放闘争を
支援する会」からの「国際連帯運動
の前進のために共にがんばろう」と
いうメッセージが読みあげられた。
続いて呼びかけ団体であるUNI
ONひごろの西浜氏から、経過報告
と運営要項・活動方針が提起された。
拍手のなかで提起に立った西浜氏は
「それぞれの労働組合が資本の攻撃
の前に反合理化や未組織労働者の組
織化に取り組んでいるが、この活動
の上にアジアの労働者の連帯が必要
というのではいけない。日本に生活
している私たち未組織労働者の組
織化と同程度、反合理化と同じ程度
の問題としてアジアの労働者との連
帯が必要になっていることを確認す
る必要がある」とのべ、センターの

労働者は許可しないといっている。そ
れは肉体労働者への差別である。そ
のような日本の現実を変えていくた
めにも、出稼ぎ労働者の合法化は必
要である。また壳春問題は合法化で
はなくならないといわれているが、
そのような日本の男社会を共にがんば
う」と、アジアからの出稼ぎ労働
者の合法化にむけた取り組みをとも
に担うことを呼びかけた。続いて韓
國労働者のたたかいの報告と、「日
韓労働者の連帯がますます強化され
なくてはならない。そのような国際
連帯を強化していくためにはみなさ
にがんばってほしい」という高麗労
連の金委員長からの提起がおこな
れた。そして佐野和歌山大学教授、
森村氏、アジア太平洋資料センター
の大橋氏の連帯のあいさつがなされ
た。最後にカラバオの会の阿部氏か
ら「日本の労働者は金銭的価値観に
慣らされているが、魂を持った人間
としての価値観を持たなければいけ
ない。そのために日常的な実践が必
要である。カラバオの会も自らがま
ず変わることが突きつけられた。ア
ジアからの出稼ぎ労働者は労働者に
国境がないことを突きつけていた
との発言があり、また出稼ぎ労働者
の合法化にむけた法務省に対する公
開質問状への協力が呼びかけられた。
続いて「アジア女子労働者交流セ
ンター」と「フィリピン解放闘争を
支援する会」からの「国際連帯運動
の前進のために共にがんばろう」と
いうメッセージが読みあげられた。
続いて呼びかけ団体であるUNI
ONひごろの西浜氏から、経過報告
と運営要項・活動方針が提起された。
拍手のなかで提起に立った西浜氏は
「それぞれの労働組合が資本の攻撃
の前に反合理化や未組織労働者の組
織化に取り組んでいるが、この活動
の上にアジアの労働者の連帯が必要
というのではいけない。日本に生活
している私たち未組織労働者の組
織化と同程度、反合理化と同じ程度
の問題としてアジアの労働者との連
帯が必要になっていることを確認す
る必要がある」とのべ、センターの



針とあわせて、アジア労働者情報交流センター・関西（準備会）の英文名称NETWORK FOR ASIAN WORKERS IN KANSAI（略称NAW）が確認された。

確認された運営要項と活動方針には、①アジア諸国の労働者と労働運動の現状を広く伝え、アジア労働者との国際連帯を発展させていくために情報紙を発行すること、②来日するアジア諸国の労働者活動家を受け入れ、できるかぎり広範な交流を実現するための媒介となっていくこと、③アジアからの出稼ぎ労働者との交流・連帯のための活動、④フィリピンをはじめとするアジアの労働者の支援物資カンパ運動の組織化、⑤アジアに進出する日本企業への抗議行動、⑥その他労働運動のなかに国際連帯を広めていくための教育活動などが掲げられている。そしてこのもとでアジア労働者情報交流センター・関西（準備会）としてアジア各国への訪問団を送り出すことなど、精力的に活動していくことが計画されている。

集会の最後に、フィリピンの女性活動家から日本の労働者にむけたアピールがなされた。そのなかで彼女は「一つは、ODAに反対する運動を日本政府に対してくり広げてほしい」ということです。こう形での援助には少しもなっていません。二つには、いまフィリピンでは低強烈度戦争で民族解放闘争をつぶそうとする動きがあり、日本がそれを後押ししているが、これに対する抗議

は、「一つは、ODAに反対する運動を日本政府に対してくり広げてほしい」ということです。こう形での援助には少しもなっていません。二つには、いまフィリピンでは低強烈度戦争で民族解放闘争をつぶそうとする動きがあり、日本がそれを後押ししているが、これに対する抗議

は、「一つは、ODAに反対する運動を日本政府に対してくり広げてほしい」ということです。こう形での援助には少しもなっていません。二つには、いまフィリピンでは低強烈度戦争で民族解放闘争をつぶそうとする動きがあり、日本がそれを後押ししているが、これに対する抗議

針とあわせて、アジア労働者情報交流センター・関西（準備会）の英文名称NETWORK FOR ASIAN WORKERS IN KANSAI（略称NAW）が確認された。

確認された運営要項と活動方針には、①アジア諸国の労働者と労働運動の現状を広く伝え、アジア労働者との国際連帯を発展させていくために情報紙を発行すること、②来日するアジア諸国の労働者活動家を受け入れ、できるかぎり広範な交流を実現するための媒介となっていくこと、③アジアからの出稼ぎ労働者との交

流・連帯のための活動、④フィリピンをはじめとするアジアの労働者への支援物資カンパ運動の組織化、⑤アジアに進出する日本企業への抗議行動、⑥その他労働運動のなかに国際連帯を広めていくための教育活動などが掲げられている。そしてこのもとでアジア労働者情報交流センタ

ー・関西（準備会）としてアジア各國への訪問団を送り出すことなど、精力的に活動していくことが計画されている。

集会の最後に、フィリピンの女性活動家から日本の労働者にむけたアピールがなされた。そのなかで彼女は「一つは、ODAに反対する運動を日本政府に対してくり広げてほしい」ということです。こう形での援助には少しもなっていません。二つには、いまフィリピンでは低強烈度戦争で民族解放闘争をつぶそうとする動きがあり、日本がそれを後押ししているが、これに対する抗議

ー・関西（準備会）としてアジア各國への訪問団を送り出すことなど、精力的に活動していくことが計画されている。

集会の最後に、フィリピンの女性活動家から日本の労働者にむけたアピールがなされた。そのなかで彼女は「一つは、ODAに反対する運動を日本政府に対してくり広げてほしい」ということです。こう形での援助には少しもなっていません。二つには、いまフィリピンでは低強烈度戦争で民族解放闘争をつぶそうとする動きがあり、日本がそれを後押ししているが、これに対する抗議

11・6 三里塚で現地闘争

人間の鎖が空港を包囲

の運動をおこなってほしい」ということです。すでに労働運動だけを見て手が会場からまきおこり、全員によるアンチナショナルが歌われるなれど、アキノ政権誕生以降一〇〇〇件以上の人権侵害が、とりわけ活動家に対するおこなわれています。三つには、アジア人民の一人として、いま日本に来ている出稼ぎ労働者のことを考えてほしいということです。彼らは日本の資本家のもとで、非常に悪い労働条件で働くられています。

センターの発展強化を

われわれは労働組合に立脚した大衆的な国際連帯機構としてのアジア労働者情報交流センター・関西（準備会）の結成を断固支持し、さらに

として、前日の東京から現地までの自転車によるサイクリングや、木の根での交流会などに続き、京成空港駅から木の根部落を縦断する人間の鎖が三キロにわたっておこなわれた。この人間の鎖に対し、機動隊は「旗をおろせ、シユープレヒコールをするな」などの規制をしようとした。しかし機動隊を上回る集会参加者の隊列に圧倒されてなすすべもなく

一月六日、反対同盟主催の三里塚現地総決闘闘争がおこなわれた。この日の闘争には、全国から労働者、学生、市民二五二〇人が結集し、空港包囲行動、集会、デモをたたかいぬいた。集会に先立つ空港包囲行動として、前日の東京から現地までの自転車によるサイクリングや、木の根での交流会などに続き、京成空港駅から木の根部落を縦断する人間の鎖が三キロにわたっておこなわれた。この人間の鎖に対し、機動隊は「旗をおろせ、シユープレヒコールをするな」などの規制をしようとした。しかし機動隊を上回る集会参加者は隊列に圧倒されてなすすべもなく

一月六日、反対同盟主催の三里塚現地総決闘闘争がおこなわれた。この日の闘争には、全国から労働者、学生、市民二五二〇人が結集し、空港包囲行動、集会、デモをたたかいぬいた。集会に先立つ空港包囲行動として、前日の東京から現地までの自転車によるサイクリングや、木の根での交流会などに続き、京成空港駅から木の根部落を縦断する人間の鎖が三キロにわたっておこなわれた。この人間の鎖に対し、機動隊は「旗をおろせ、シユープレヒコールをするな」などの規制をしようとした。しかし機動隊を上回る集会参加者は隊列に圧倒されてなすべもなく

わたってたたかいぬいてきた反対同

盟を、これまでどおりのやり方では

つぶせないことを痛感し、特別立法などのより強権的な手段を検討している。三里塚にかぎらず、天皇Xデ

ー状況や消費税の強行審議などをはじめとして、「戦後政治の総決算」（戦争のできる国家づくり）の一挙

日帝は、アジアをはじめとした新植民地主義支配による莫大な利潤を維持するためには、直接の軍事出動以外に道がない状況にある。このなかで、労働者人民の排外主義への組織化と軍事力増強に唯一の突破方向を見出さんとしている。三里塚闘争の勝利は、日帝の侵略反革命戦争一軍はじめ、世界のたたかう労働者人民と連帯し、帝国主義的な労働戦線統一と対決する先進的な労働者との結合を強め、プロレタリア階級闘争の陣形をより強化していかねばならない。

その発展のためにあらゆる援助を惜しまず、先進的活動家たちとともにたたかう決意である。なぜなら、国際帝国主義への飛躍をかけた日帝による侵略反革命と排外主義の攻勢のかで、さらには労働運動の帝王に日本に来る出稼ぎ労働者のこと

と訴えた。

この発言に対し、熱い連帯の拍手が会場からまきおこり、全員によるアンチナショナルが歌われるなれど、アキノ政権誕生以降一〇〇〇件以上の

人権侵害が、とりわけ活動家に対するおこなわれています。三つには、アジア人民の一人として、いま日本に来ている出稼ぎ労働者のこと

が労働者上層を基盤に自然発生していく時代にあって、産業報国会運動から労働者大衆を分岐させていく基軸として、国際主義にもとづいた労働者情報交流センター・関西（準備会）の結成を断固支持し、さらに

かで、ますます帝国主義的排外主義による侵略反革命と排外主義の攻勢のかで、さらには労働運動の帝王として、国際帝国主義への飛躍をかけた日帝に

が労働者上層を基盤に自然発生してくる時代にあって、産業報国会運動から労働者大衆を分岐させていく基軸として、国際主義にもとづいた労働者情報交流センター・関西（準備会）の結成を断固支持し、さらに

かで、ますます帝国主義的排外主義による侵略反革命と排外主義の攻勢のかで、さらには労働運動の帝王として、国際帝国主義への飛躍をかけた日帝に

が労働者上層を基盤に自然発生してくる時代にあって、産業報国会運動から労働者大衆を分岐させていく基軸として、国際主義にもとづいた労働者情報交流センター・関西（準備会）の結成を断固支持し、さらに

三里塚闘争の発展を

天皇Xデー状況下でかちとられた一一・六の政治決起の地平を引きつけ、三里塚現地における機動隊の日常支配と対決しつつ、三里塚闘争をプロレタリア政治闘争として発展させよう。

あいば野に 反基地の声

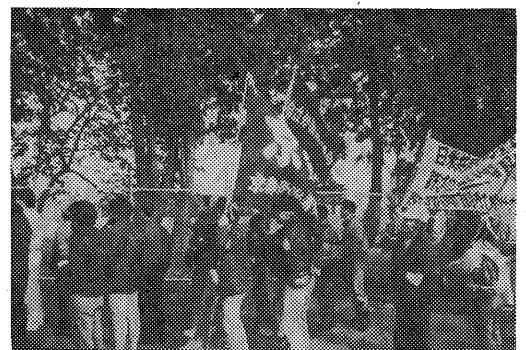
「復帰」から一六年目を迎える沖縄
激化する米軍演習 (三九八号)
政治闘争の負の側面をあらわにし
たものであった。だが先進的労働
者・学生は、日帝の侵略反革命戦
争の歴史的準備と、その一環とし
ての日米安保の実戦・即戦体制化
をうち破るたたかいとして当日の

一一月一九日から一二月一日にかけて滋賀県の陸上自衛隊あいば野演習場において、日米共同軍事演習が強行された。

八年に続き関西で二度目となつたこの日米共同軍事演習は、陸上自衛隊第三師団五〇〇名と、第三海兵師団五〇〇名が参加し、「攻撃主体」の軍事演習としてくり広げられたのである。今回の演習は、米第三海兵師団がアジアにおける有事の際に真先に上陸攻撃を敢行する戦闘部隊であることか

11・19 「日米共同演習許すな」

滋賀



烽火の定期講読をおねがいします

遠い夜明け

(三九二号)

烽火の定期講読をおねがいします

郵送一年分・三〇〇〇円

(月刊)

映画批評

新右翼

(三九六号)

燃える中南米

(三九六号)

書評

フィリピン共産党重要文献集

(三九四号)

議集会は、「平和と民主主義」の

(三九四号)

抗議集会が開かれた。総評系の抗

(三九四号)

同の現地闘争の大衆的爆発をこそ

(三九四号)

独自に準備しなければならない。

(三九四号)

平和の像破壊を許さない

(三九四号)

知花昌一氏に聞く

(三九三号)

中米連帯運動の強化をめざして

(三九三号)

太田昌国

(三九三号)

・見えてきた本当の敵

(三九三号)

・洛南合労組員

(三九三号)

インタビュー

(三九三号)

寄稿

(三九八号)

・平和の像破壊を許さない

(三九八号)

- 沖縄闘争
 - ・「復帰」から一六年目を迎える沖縄
激化する米軍演習 (三九四号)
- 労働運動
 - ・八八年春闘アピール (三九九号)
 - ・階級的労組の全国的統合 (三九三号)
 - ・社会主義連合を批判する (三九五号)
 - ・大型間接税の導入を阻止せよ (三五六号)
 - ・反戦反核運動を国際連帯闘争とかたく結びつけよ (三九七号)
 - ・四〇〇号発刊を記念して (三九〇号)
 - ・①フィリピン階級闘争史・上 (三九三号)
 - ・②フィリピン階級闘争史・中 (三九四号)
 - ・③フィリピン階級闘争史・下 (三九五号)
 - ・④米日帝の新植民地支配・上 (三九六号)
 - ・アゼマを拠点に世界に乗りだす日帝・上 (四〇〇号)
 - ・八八年の国際・国内政治をふりかえって (三九一号)
- 国際評論
 - ・大韓機謀略事件を許さない (三九〇号)
 - ・⑥なにをなすべきか (三九八号)
- 古典学習
 - ・現地闘争をたたかいぬいた。あいば野での日米共同軍事演習の定着化策動のなかで、今後は、より広範な労働者階級と学生の共同の現地闘争の大衆的爆発をこそ独自に準備しなければならない。
- 寄稿
 - ・平和の像破壊を許さない (三九八号)
 - ・中米連帯運動の強化をめざして (三九三号)
 - ・太田昌国 (三九三号)
 - ・見えてきた本当の敵 (三九三号)
 - ・洛南合労組員 (三九三号)
 - ・知花昌一氏に聞く (三九三号)
- インタビュー
 - ・太田昌国 (三九三号)
- 書評
 - ・フィリピン共産党重要文献集 (三九四号)
 - ・新右翼 (三九六号)
 - ・燃える中南米 (三九六号)

烽火掲載文章一覧

☆390~401号

88年



- 沖縄闘争
 - ・「復帰」から一六年目を迎える沖縄
激化する米軍演習 (三九四号)
- 労働運動
 - ・八八年春闘アピール (三九九号)
 - ・階級的労組の全国的統合 (三九三号)
 - ・社会主義連合を批判する (三九五号)
 - ・大型間接税の導入を阻止せよ (三九五号)
 - ・反戦反核運動を国際連帯闘争とかたく結びつけよ (三九七号)
 - ・四〇〇号発刊を記念して (三九〇号)
 - ・①フィリピン階級闘争史・上 (三九三号)
 - ・②フィリピン階級闘争史・中 (三九四号)
 - ・③フィリピン階級闘争史・下 (三九五号)
 - ・④米日帝の新植民地支配・上 (三九六号)
 - ・アゼマを拠点に世界に乗りだす日帝・上 (四〇〇号)
 - ・八八年の国際・国内政治をふりかえって (三九一号)
- 国際評論
 - ・大韓機謀略事件を許さない (三九〇号)
 - ・⑥なにをなすべきか (三九八号)
- 古典学習
 - ・現地闘争をたたかいぬいた。あいば野での日米共同軍事演習の定着化策動のなかで、今後は、より広範な労働者階級と学生の共同の現地闘争の大衆的爆発をこそ独自に準備しなければならない。
- 寄稿
 - ・平和の像破壊を許さない (三九八号)
 - ・中米連帯運動の強化をめざして (三九三号)
 - ・太田昌国 (三九三号)
 - ・見えてきた本当の敵 (三九三号)
 - ・洛南合労組員 (三九三号)
 - ・知花昌一氏に聞く (三九三号)
- インタビュー
 - ・太田昌国 (三九三号)
- 書評
 - ・フィリピン共産党重要文献集 (三九四号)
 - ・新右翼 (三九六号)
 - ・燃える中南米 (三九六号)

- 沖縄闘争
 - ・「復帰」から一六年目を迎える沖縄
激化する米軍演習 (三九四号)
- 労働運動
 - ・八八年春闘アピール (三九九号)
 - ・階級的労組の全国的統合 (三九三号)
 - ・社会主義連合を批判する (三九五号)
 - ・大型間接税の導入を阻止せよ (三九五号)
 - ・反戦反核運動を国際連帯闘争とかたく結びつけよ (三九七号)
 - ・四〇〇号発刊を記念して (三九〇号)
 - ・①フィリピン階級闘争史・上 (三九三号)
 - ・②フィリピン階級闘争史・中 (三九四号)
 - ・③フィリピン階級闘争史・下 (三九五号)
 - ・④米日帝の新植民地支配・上 (三九六号)
 - ・アゼマを拠点に世界に乗りだす日帝・上 (四〇〇号)
 - ・八八年の国際・国内政治をふりかえって (三九一号)
- 国際評論
 - ・現地闘争をたたかいぬいた。あいば野での日米共同軍事演習の定着化策動のなかで、今後は、より広範な労働者階級と学生の共同の現地闘争の大衆的爆発をこそ独自に準備しなければならない。
- 古典学習
 - ・平和の像破壊を許さない (三九八号)
 - ・中米連帯運動の強化をめざして (三九三号)
 - ・太田昌国 (三九三号)
 - ・見えてきた本当の敵 (三九三号)
 - ・洛南合労組員 (三九三号)
 - ・知花昌一氏に聞く (三九三号)
- インタビュー
 - ・太田昌国 (三九三号)
- 書評
 - ・フィリピン共産党重要文献集 (三九四号)
 - ・新右翼 (三九六号)
 - ・燃える中南米 (三九六号)

- 沖縄闘争
 - ・「復帰」から一六年目を迎える沖縄
激化する米軍演習 (三九四号)
- 労働運動
 - ・八八年春闘アピール (三九九号)
 - ・階級的労組の全国的統合 (三九三号)
 - ・社会主義連合を批判する (三九五号)
 - ・大型間接税の導入を阻止せよ (三九五号)
 - ・反戦反核運動を国際連帯闘争とかたく結びつけよ (三九七号)
 - ・四〇〇号発刊を記念して (三九〇号)
 - ・①フィリピン階級闘争史・上 (三九三号)
 - ・②フィリピン階級闘争史・中 (三九四号)
 - ・③フィリピン階級闘争史・下 (三九五号)
 - ・④米日帝の新植民地支配・上 (三九六号)
 - ・アゼマを拠点に世界に乗りだす日帝・上 (四〇〇号)
 - ・八八年の国際・国内政治をふりかえって (三九一号)
- 国際評論
 - ・現地闘争をたたかいぬいた。あいば野での日米共同軍事演習の定着化策動のなかで、今後は、より広範な労働者階級と学生の共同の現地闘争の大衆的爆発をこそ独自に準備しなければならない。
- 古典学習
 - ・平和の像破壊を許さない (三九八号)
 - ・中米連帯運動の強化をめざして (三九三号)
 - ・太田昌国 (三九三号)
 - ・見えてきた本当の敵 (三九三号)
 - ・洛南合労組員 (三九三号)
 - ・知花昌一氏に聞く (三九三号)
- インタビュー
 - ・太田昌国 (三九三号)
- 書評
 - ・フィリピン共産党重要文献集 (三九四号)
 - ・新右翼 (三九六号)
 - ・燃える中南米 (三九六号)